

大学生との哲学対話におけるファシリテーターの姿勢の検討

—— 第1回「対話の時間」——

田中 直美⁽¹⁾

本稿の目的は、第1回「対話の時間」の実践内容を報告するとともに、その対話のふりかえりを通して、大学生との哲学対話を実践するファシリテーターの姿勢にたいする示唆を得ることである。まず、「対話の時間」がどのようにおこなわれたのかを報告し、次に本実践の後におこなったふりかえりシート及びインタビュー調査の分析をおこなった。最後に、そうした場づくりの要因が教師の傾聴の姿勢以外にも多くあることが明らかになったことを示した。

キーワード：哲学対話、教師の姿勢、ファシリテーター、大学生、対話実践

1 はじめに

本稿の目的は、第1回「対話の時間」の実践内容を報告するとともに、本実践のふりかえりを通して、大学生との哲学対話を実践するファシリテーターの姿勢にたいする示唆を得ることである。

2010年代の半ばごろから、「子どもの哲学」「p4c」「哲学対話」などと呼ばれる教育実践が日本の学校教育の文脈でも論じられることが多くなってきた¹。こうした名称で呼ばれる教育実践は、「アメリカの哲学者のマシュー・リップマンがアン・マーガレット・シャープラとともに1960年代末から70年代にかけて開発した『子どものための哲学(Philosophy for Children:P4C)』を主な源流として発展してきた²。

本稿では、「日本の学校教育の文脈に限定する限り、上記の名称の下で行われている教育実践の間に顕著な理念上・方法論上の相違はない³」こと、そして今回の「対話の時間」の対象が大学生であることに鑑み、「哲学対話」という用語を用いることにする。

また、特に学校での実践はトマス・ジャクソンをはじめとするハワイでの実践(p4cHawaii)のスタイル、とりわけ、①「知的な安全性」を重視した場づくり、②子どもの「問い」を中心に進めること、③「コミュ

ニティボール」による対話の進行(教員は共同探究者)というスタイルの影響を大きく受けている⁴。

ただし哲学対話は、土屋が指摘するように、『方法』ではなく、子どもたちが安心して自由に考え対話できる空間を教室の中に作り上げていくという『理念』の共有によって結びついた教育実践の総称であり、そうした「理念の下でおこなわれる雑多な実践の集積⁵」である。

このように、哲学対話には唯一の正しい実践法が存在するわけではないが、「日本国内では2000年代における関西圏や宮崎県における先駆的実践期、2010年代における首都圏の国立・私立学校における継続的実践期を経て、現在は全国各地の一般的な公立小中高でも試みられる普及期の段階に入って」きている⁶。近年では、小中学校の「特別の教科 道徳」や小学校の国語科、高校の公民科といった教科教育の中での哲学対話の取り組みが増えている⁷。

以上のように初等・中等教育において実践されることが多い哲学対話であるが、筆者はこのような哲学対話をp4cHawaiiのスタイルを参考に大学という場で実践している。例えば、初年次教育の入門ゼミでは、自らの問いを発見し探究する意欲や他者と共に考えを深

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: n-tanaka@fcu.ac.jp

める大切さを学ぶことを目的に、また、道徳に関する授業においては、道徳の授業における教師のかかわり方を検討するために、実践をおこなっている。

今回の「対話の時間」の目的は、対話がどのように教科教育に活かされるのかや対話においてどのように考えが深まっていくのかを明らかにすることではなく、その前提条件ともなる、参加者にとって安心・安全な場の構築のために、どのような教師の姿勢が求められるのかを明らかにすることを目的に、授業時間外に「対話の時間」を設定し、希望者を募って実施した。

2 方法⁸

2.1. 実施日時

本調査では、2022年10月末から11月に「対話の時間」の参加者を募集し、希望者にはGoogle Formsにより実施希望日を伺った上で、希望者が最も参加できる2022年12月19日（月）13:10～14:40に実施した。

2.2. 実施場所

福山市立大学の30人程度収容できるゼミ室にて実施した。

2.3. 協力者

本調査では、学部生・大学院生の希望者7名が参加した。なお7名中6名が筆者の講義等で哲学対話に参加・見学した経験がある学生であった。

2.4. 倫理的配慮

調査協力の依頼の際には、研究の趣旨を説明し、板書と音声のみを録画し、得られたデータを個人が特定されないようにデータ化した上で分析および調査結果が公表されることを確認し、調査協力への同意を書面に任意回答するように依頼した。

さらに対話終了後のふりかえりシート回答の際にも、Google Formsの最初のページで、ふりかえりシートで記入する本名と学籍番号等は次回「対話の時間」の案内や、インタビューの協力をお願いする際の連絡用として使用することを確認すると共に、再度調査協力への同意を任意回答するように設定している。

なお、本調査は事前に本学の倫理審査を受けている。また、本稿では参加者をニックネームや本名とは関係なく、A～Gまでの記号で表記する。

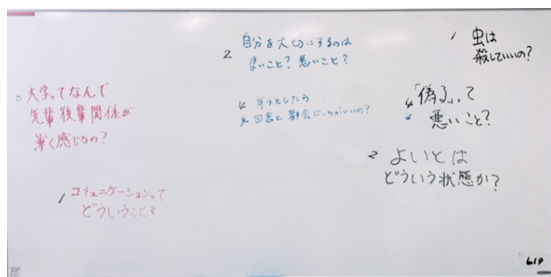
2.5. 調査内容

本研究では、「対話の時間」を90分の時間で次の流れでおこなった。

まず、①本研究の趣旨説明、②倫理的配慮についての説明、③哲学対話とはどのようなものかについての説明、④ニックネーム決め及び名札づくり、以上を10分程度でおこなった。

次に、参加者全員で机を動かし、車座に椅子を並べ、対話を実施できるようセッティングをおこなった。

全員の顔が見えるかたちで座り、コミュニティーボールを作成しながら（1）好きなお菓子（2）冬のお気に入りの過ごし方の2点について自己紹介をおこなった。（2）については、反対側に座っている参加者から質問をもらいそれに答える形で自己紹介をおこなった。その後、全員から今ここに参加しているみんなと考えたい問いを出し、その理由も伝えあった。問いは次の写真の通りである。



多数決により今回の問いは「育つなら田舎がいいか都会がいいの」に決定した。

対話を始める前にルールを確認し、まずこの問いを出したCさんにコミュニティーボールを渡し、対話を開始した。

対話は35分ほどおこない、対話の最後に一言ずつ参加者全員が順番に感想を述べ、対話は終了した。

時間の都合上、90分の時間内でふりかえりの時間を設けることはできなかったため、ふりかえりシートとしてGoogle Formを案内し、「対話の時間」を終了した。

3 調査結果

参加者7名中7名全員からふりかえりシートの回答が得られた。なお、趣旨説明及び倫理的配慮の説明の際にも、ふりかえりシートは任意であることを伝え、さらにGoogle Form上で「同意する」を選択しなければ

ば回答できず、「同意しない」を選択した場合は、その画面で終了となるように設定した。

ふりかえりシートの質問項目は大きく①対話の参加状況をふりかえる質問、②対話の環境をつくるファシリテーターのあり方をふりかえる質問という2項目を設定した。なお、5段階評価で記入する質問に関しては、5が高評価である。

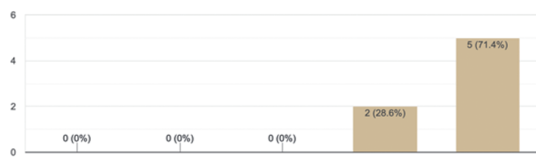
3. 1. 参加者による自身の参加状況のふりかえり

まず、対話の参加状況をふりかえる質問として、以下の6つをおこなった。順に考察していく。

(1) あなたは対話のメンバーの話をどのくらい聞くことができましたか。

あなたは対話のメンバーの話をどのくらい聞くことができましたか。

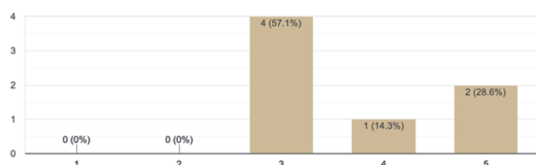
7件の回答



(2) あなたは自分の考えを伝えることができましたか (大きな声で理由をつけて)。

あなたは自分の考えを伝えることができましたか (大きな声で理由をつけて)。

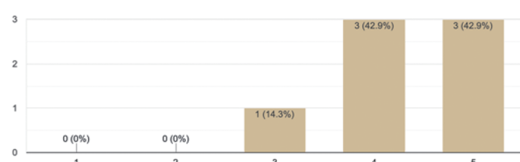
7件の回答



(3) 私たちは今日の問いについてよく話し合い、考えを深めることができましたと思いますか。(思い込みに気付いたり、新しい考えにたどり着いたなど)

私たちは今日の問いについてよく話し合い、考えを深めることができましたと思いますか。
(思い込みに気付いたり、新しい考えにたどり着いたなど)

7件の回答



(4) どうしてそう思いますか?具体的に教えて下さい。

この質問に関して、7名それぞれが理由を述べたが、評価を高くつけた理由は次の通りである。

【高い評価】

- ①田舎と都会で暮らすメリット・デメリットを知ることができたから。(2票)
- ②他の参加者がその人が本当に考えていたことに対話の中で気づいたということ話を話していたから。
- ③自分の新しい意見を言うだけでなく、他者の意見から繋がる意見を言ったり、その意見を更に深め、関連付けながら述べるのが出来ていたから。
- ④新たに自分が大切にしたい価値観に気づけたから。(2票)
- ⑤自分の考えがまとまったから。
- ⑥自分にはない新たな視点に会えたため。(2票)

一方、この質問に関して評価を低くつけた理由(最高値5ではない理由)としては、次の回答が見られた。

【低い評価】

- ①もう少しテンポよく次の人にボールを回してより多くの意見を出すことも出来たから。
- ②都会と田舎のメリット/デメリットを挙げていくことに注力してしまったこと、自分の中で生まれた問いを全体に共有できなかったため。

以上の回答から、参加者は、たんに普段考えないような田舎と都会のメリット・デメリットを列挙したことで「深めることができた」と捉えているわけではなく、メリット・デメリットを挙げる過程で、あるいはこの問いそのものをどのような視点から掘り下げるかを考えながら、自身の考えや価値観を他者の言葉を手がかりに明確にすることができたり、他者の意見を聞き、それが自身の考えとどのように関連付くのかを考え、自身の考えに新たな視点を加えながら新たな自身のモノの見方へと発展させることが「深めること」だと捉えていることが窺える。

(5) 今回対話した内容から、さらに考えたい「問い」を1つ教えて下さい。(疑問形で)

- 【A】他人との程よい距離はどのくらいか?
- 【B】人間関係は、「狭く深く」の方が良いか、「広く浅く」の方が良いか。
- 【C】人との関わりは無理してでも持続すべきか?
- 【D】ど田舎と大都会、育つならどっちが子どもにとってよいのか?
- 【E】自然が豊かな場所で育つと感性は豊かになるのか?
- 【F】どうして都会は近所付き合いが少ないのだろう?
- 【G】居場所感を得るには、愛情や温もりが重要なのか。

このように全員から回答が得られた。いずれも今回の対話の内容を踏まえて、それぞれがさらに深めたい問いである。一見すると、例えば⑤の回答は、今回の対話の時間の中でも議論できたかもしれない問いではあるが、限られた時間の中で取り上げられなかった視点を見逃さず、さらに問い続けたいという姿勢が窺える回答とも捉えられるだろう。

(6) 今回の対話の感想を教えてください。

この質問に関して、7名全員から回答を得たが、ここではとりわけ安心・安全な場にかかわる2名の回答を取り上げ、次節でさらに検討する。

【B】これまでの対話の経験があったことで、対話の時間の楽しさや意義を知っている状態で今日参加することが出来ました。また、前回よりも、考えの変化に価値を見だし、今後の行動に繋げていくことの意味を意識しながら対話を行うことが出来たように思います。私は、対話をする心が落ち着きます。自分の考えを表出する機会に参加しようという気持ちもありますが、他者に否定されないあの空間が大好きです。そして、私自身も相手の話を丁寧に聞きたいという気持ちになります。今回も、そのことを実感することが出来ました。

【D】[……] 今回7人でも周りの人と発言数を合わせるため発言を抑えたのに、1クラスだったら発言が難しくなるなと思いました。発言のテンポもあまりよくなかったですが、はじめてのメンバーだからこれから回を重ねるとどんどん意見がテンポよくいくのかな？と思うとまたみんなに対話したいなと思いました。今回のテーマだったらファシリテーターの意見も対等に聞けるかなと思ったので、テーマによってファシリテーターがどこまで介入すべきかも変わるのかもしれないと考えました。[……]

まず、上記の【B】(以下Bさんと表記する)の回答の下線で強調した箇所からは、①過去に哲学対話をしたことがあるという経験があること、②自分の意見が言える場であること、そして③他者に否定されないことが、「心が落ち着く」対話の「空間」を構成していることが窺える。また、今回は初めてのメンバーだったため、「発言のテンポもあまりよくなかった」という【D】(以下Dさんと表記する)の回答からは、何度も哲学対話の場を設けることが、発言のテンポが良くなる、つまり安心・安全な場で対話ができることにつながると捉えられている。

次節では、ふりかえりシートで質問したファシリテーターのあり方についての回答を踏まえ、より詳細

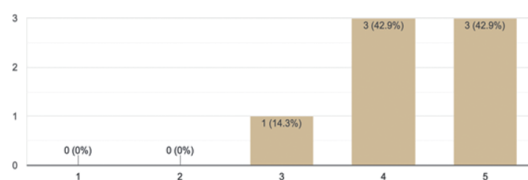
に彼らの考えを聞くためにおこなったインタビューを通して安心・安全な場を構築するファシリテーターの姿勢を検討する。

3.2. 参加者によるファシリテーターのふりかえり

次に、ふりかえりシートでは、対話の環境をつくるファシリテーターのあり方をふりかえる質問を、4つおこなった。

(1) 今回の対話は、あなたにとって安心・安全な空間で行われましたか。

今回の対話は、あなたにとって安心・安全な空間で行われましたか。
7件の回答



(2) どうしてそう思いますか。

この質問に関して、7人全員から回答を得たが、評価を高くつけた理由は次の通りである。

【高い評価】

- ①自己紹介の時点で相手を否定しない姿勢が育まれていて、対話でもそれが活かされていたから。(2票)
- ②初めに、対話をする上で守るべきルールと、心配しなくて良い点を先生が示してくださり、参加者の全員がそれを守りながら対話を行うことが出来たから。
- ③対話する人たちから傾聴の姿勢を感じたから。
- ④意見を批判されたりすることがなく、周囲の人々が自分の話に傾く姿が見られたことで安心して意見を出すことが出来たため。

一方、評価を低くつけた理由(最高値5ではない理由)は、次の回答が見られた。

【低い評価】

- ①問いだしの際に、他の人が自分が話したくないお題を提起して、今回はそうではなかったが、それについて対話する自信がなかったから。
- ②気を使う必要はないと分かっていたが、院生がいるということで、少し気を使いながら発言したりしなかったりする場面があったから。
- ③はじめての方や、お会いするのが二度目の方がいて緊張したから。

以上の回答から、対話をする際のルールと自己紹介

によって、参加者同士が相手を否定しない姿勢、傾きなどにより相手の意見を傾聴する姿勢で臨んでいると認識することが、安心安全な空間をつくりあげていることが確認できる。また、参加者が初対面なのか、メンバーの中に学年が上の者がいるかどうかによって、緊張したり気を使うなど、落ち着いて話すことが難しい状況が生じていたことも窺える。

(3) 今回ファシリテーターはどのようなことを意識して対話に参加していたと思いますか。

- 【A】参加者になるべく多く発言できるようにしていた。また、ファシリテーターが対話の中で権力を持って立場が上にならないようにしていた。参加者の発言をなるべくそのまま残そうとしていた。
- 【B】田舎派か都会派でどちらの方が良いと言い切れなくても、考えの揺れる部分まで丁寧に汲み取ることを意識されていたと思います。また、都会派と田舎派で分かれた意見が出た場合でも、それぞれにあるキーワードを汲み取って揺さぶりをかけることを意識されていたように思います。
- 【C】出来るだけ干渉せず、それぞれの考えの邪魔をしないように気を付けていたと思う。
- 【D】話を進めること、参加者に考えを促すこと
- 【E】新しい意見が思いつきやすいように意識しながら対話に参加していたのではないかと思います。
- 【F】話に入り込みすぎないこと
- 【G】話の方向性を阻害しないように思えた。

(4) どうしてそう思いましたか。どのようなファシリテーターの参加姿勢・態度からそう思いましたか。

- 【A】参加者になるべく多く発言できるように、ファシリテーターはあまり声を出していなかった。発言を急かすような言葉を言っていなかった。「ボールをこの人に渡したら？」というような権力を持つような進行の仕方をしていなかった。ホワイトボードに書く時に、「おじいちゃんおばあちゃん」と書いていたところから。
- 【B】具体的なキーワードで言えば、「コミュニケーション」や「人との触れ合い」という言葉を取り上げ、「両方にあるこの部分についてはどう思いますか？」と投げかけられていたところからそう思いました。
- 【C】お題について対話するとき、ほぼ干渉することが無かったから。はじめだけ、どう進めれば良いか分からず進め方としての案を出すだけだった。また、ホワイトボードも参加者が整理しやすいように書く位置関係を考えながら書いていたから。
- 【D】序盤で話が進まない時に参加者に問いかけていたから。
- 【E】意見をまとめながら関係性をホワイトボードに示すことで、対話を行う人々が出てきた意見を見ながら考えられるようにしていたり、先にでてきた意見と結

びつけることで、新しい意見を思いつけるように援助していたのではないかと思います。

【F】間が生まれてもすぐに入ったり、軌道修正したりしなかったため。

【G】「人が育つには」という前提が半ば無視されながら進んでいた話し合いにあまり介入しなかった点から。

以上の(3)及び(4)の質問に対する回答からは、ファシリテーターはできるだけ参加者が発言できるように、自己紹介の時間には多く介入することがあったが、テーマについて対話する際にはほとんど介入することがなく、主にホワイトボードで発言の整理に徹していた、と参加者が感じていたことが分かる。

4 調査結果の考察

4.1. インタビューによる分析

以上のふりかえりシートの結果から、安心・安全な場とはどのような場であると参加者が感じ、そのためにどのようなファシリテーターの姿勢が必要なのかをより詳しく検討するために、約1か月後の1月23日と1月24日に、安心・安全な場づくりに関して言及されていた回答者に、任意のインタビューを一人40分～1時間程度おこなった。協力者は対話に参加した7名のうち5名である。

インタビューでは、次の4点を質問項目として設定し、質問の応答として掘り下げる必要があると筆者が判断した回答のみ、さらに質問をおこなった。質問は、①対話をふりかえって一番印象に残っていること、②「心が落ち着く」ことがあったか、あるいは安心・安全な場であったか、③ファシリテーターは、全員で協力して深めること、ルールに則ってファシリテーターも一生懸命考えることを実践していたと思うか、④その他何かコメントはあるか、である。

ここでは、3.1.(6)で「対話をする心と心が落ち着きます」と回答していたBさん、そして何度も哲学対話の場を設けることが、安心・安全な場で対話ができることにつながると捉えていたDさんのインタビューを取り上げる。逐語録でインタビューの一部を抜粋し、考察をおこなう。なお、Tは質問者、つまり筆者である。録音した音声聞き取れなかった部分は●で示している。

4. 1. 1. 「心が落ち着く」対話の場

Bさんは、インタビューの開始直後の質問「①対話をふりかえって一番印象に残っていること」で、安心感があったことを述べたため、質問者はその回答を掘り下げることにした。

①

B: やっぱ授業の時と同じように安心感があって、授業で経験したからその分、経験したことも踏まえてきたなと思ってます。
T: それ、振り返りシートにも書いてくれますよね。
B: そうです、はい。
T: その安心感ってどんなところ。
B: 授業の時も言ったんですけど、もともと自分の言いたいことをきれいに言えないっていうのがあったんですけど、それを否定されずゆっくり最後まで聞いてくれるっていう安心感です。

Bさんは自分で自分が言いたいことをきれいに言えないと認識しており、言いたいことがうまく言えないにもかかわらず、他の人たちがそれでも最後までセカすことなく聞いてくれることがBさんにとって安心感を与えていたと捉えている。さらに、ふりかえりシートを用いながら、質問者は安心感と「心が落ち着く」ことのつながりについて質問した。

②

T: 安心感。安心感って、心が落ち着くっていうことも多分書いてくれたと思うんですけど、タイム遅いと心が落ち着きますっていう感想があったんですけど、そのことです？
B: そうですね。
T: そうなんですね。
B: はい。
T: 心が落ち着くとはそういうこと。何か今回、時間、多分30分、40分ぐらいの対話だったと思うんですけど、セカされてるとかそういうことは感じなかった？
B: そうですね。いつも授業の時も、途中で「もう大丈夫ですよ」みたいな感じで終わられるじゃないですか。きれいに●でもなんですけど、答えを求めてるじゃなくて、いろんな意見を出して自分の行動を少しずつ変えていくみたいな。そのゆったりとした感じが好きです。
T: なるほどね。そうか、そうか。そうしたら、どうしてゆったり話せたと思います？ その心が落ち着く感じ、どうして安心感があったんだろう。
B: 言ったことに対して否定も肯定も言葉でされるんじゃないかって、態度で周りの人たちがうなずきだったり、共感だったりっていうのがあったので、言葉を挟まれずに自分のタイミングで言って、なおかつ共感してもらってる感じが安心できました。

Bさんの回答からは、答えを誰かから急かされて求めているのではなく、問いの答えを探すために、時間をかけて、参加者がいろいろな意見を出して、自分の意見を改めたり変えたりしていく、「そのゆったりとした感じ」が安心感であることが窺える。しかも、その探究の過程では、自身の発言に対して言葉ではなく、頷きや共に考える態度があったからこそ、「ゆったりと」話せたようである。Bさんにとっては、「何か言わないといけない」という逼迫した状況に置かれることが安心ではない空間であり、これまで参加した対話同様、今回の対話でもそのような場ではなかったと感じていたことが分かる。

③

T: 揺さぶられたけど、安心感はあった？
C: そうですね。何かしーんと何にも話が進まないっていうのが私にとっては安心じゃない感じなんですけど、それが揺さぶられてさらに話が盛り上がっていった、それに自分の意見を加えるっていう、この会話みたいなが続いていくのも安心感だったのかなって思いますけど。
T: じゃ、完全な沈黙は安心感ではない。
C: そうです。私にとってはそうなんです。それが見た目、見た感じ、悩んだり、「あ、何だろうな」みたいに考えている態度とかを見るのも安心なんですよ。何にもないっていう、しーんっていうのが。
T: 考えてなかった部分。
C: そうです。「何か言わないと」みたいな感じになっちゃう。
T: 「何か言わないと」という感じが安心感ではない。
C: そうですね。

また、上記の点に加え、以前参加した対話の時とメンバーが多少異なることについて話をした際に、安心感にはメンバーがほとんど同じであったことによるところもあるが、「ファシリテーターの先生が同じだったっていうのもあるかもしれない」と答えている。しかし、一方でBさんは自身の性格上、「新しい方とも話してみたいみたいな気持ちが強いので、安心感にそれもつながったのかなって思います」とも述べている。

したがって、Bさんの言う「心が落ち着く」または「安心感」とは、今回のインタビューからは、①参加者が最後まで急かすことなく自分の発言を聞いてくれること、②自分の意見を改めたり変えたりしながら、強制的ではない形で参加者の側から問いの答えを探す過程を、時間をかけて享受すること、③これまでの対話の

時とファシリテーターが同じであること, ④これまでの対話の時と参加者が同じであること, ⑤今まで話したことのない人と話す意欲があること, 以上の5点が関係していることが明らかになった。

ただし, 特に③については筆者以外のファシリテーターの対話に参加した時と比べる必要があるだろうし, ④については, 全員が初対面の対話をおこなって比較検討した上で, 本当にBさんにとって要因となっているのかを確認する必要があるだろう。だが, Bさんが他の哲学対話という場と比較検討できない中で, ③と④を要因として挙げたことは, おそらく他の授業などの場面と比較しているのではないかと想定することもできる。こうした点については, 量的研究も必要になるかもしれないため, 今後の課題としたい。

4. 1. 2. 「時間」が不可欠な対話の場

次に, ふりかえりシートで発言のテンポについて記入していたDさんへのインタビューでは, ①印象に残っていることについて質問した際に, 「2回, 3回, 4回であるんだったら, まあ, みんなの発言する機会もいっぱいあるから, 自分も発言しちゃおうって思って発言するかもしれないと思ったので。回数を重ねたらもっと深く話ができるかなと思いました」と補足があった。続けて, Dさんは自身が対話が始してから2・3人目で発言したことを思い出しながら, 次のように回答している。

①

D: はい。その後に, まだ発言してない人が4人、4～5人いたので, やめとこうかな、取りあえず皆さんが話してからのほうがいいかなと思って。もう、2回目、3回目があるとしたら、まあ、今回自分がいっぱい話しても、次回他の人が話すかなとも考えました。
T: うーん。なるほど、その、全員が話すっていうことに重きを置いてたわけですね。
D: そうですね。

この回答では, Dさんにとっては対話の参加者全員が同じくらしい回数で各々の意見を話すことが大事であり, もし同じテーマについてまた話す機会が保証されていれば, 発言も増えた可能性が示唆されている。

また, ②安心・安全な場であったかという質問については, 次のように回答していることから, たんに対話の空間に慣れるために回数を増やすことが大切なの

ではなく, 他者の意見を, 自分への人格批判ではなく意見の批判だと捉えるにも時間がかかると捉えていることが窺える。

②

D: そうですね。うーん。やればやるほど、恐らくまあ、前回の対話の時は、何か反対意見というか、そういうのが出てなかったんで、4にしたんですけど。回を重ねると、意見に対する批判も出てくるのかなと思うと、3になったり2になったりすることはあるかもしれないんですけど。でもこれは意見に対する批判であって、人格の批判ではないというふうに、多分、重ねていけば考えが自分の中で納得していくと思うので。今回4ですけど、まあ4、4、3、2、3、4、5、5、5、5、5、5ぐらいになるんじゃないかなあと思ってます。

T: なるほど。

ただし, 「心が落ち着く」ことがあったかと質問した際には, Dさんは, 「自分は落ち着くとか安心するっていうよりも, 自分じゃない人の価値観とか考えが知れるっていうところの楽しさのほうが強い気がしますね。何か, 初めましての人にもたくさんいたので, 何か落ち着くために話をするっていうよりは, そっちのほうか」と答えている。したがって, 心が落ち着くために対話をするのではなく, 新しい考えを知る楽しさを享受するために話を対話をしていることが窺える。

4. 2. ファシリテーターの認識及び先行研究との比較による分析

インタビューの③「ファシリテーターは, 全員で協力して深めること, ルールに則ってファシリテーターも一生懸命考えることを実践していたと思うか」という質問では, 回答者5名中5名がそうだと思うと回答した。なお, インタビュー中に話の流れで5名中2名が, もう少しファシリテーターの意見も聞きたかったとコメントしたが, 5名中3名はファシリテーターは話の整理をしていたと話していた。

3.2.でも見たように, ふりかえりシートでの回答からは, ファシリテーターはできるだけ参加者が発言できるように, 対話する際にはほとんど介入することがなく, 主にホワイトボードで発言の整理に徹していた, と参加者が感じていたことが窺えたが, 参加者はファシリテーターの考えも聞きたかったようである。それゆえ, もう少し介入してもよかったのかもしれないが, ファシリテーター自身は, まだ参加者から新しい視点が出てくだろうと考えていたため, 介入を控

えていた。対話の記録を確認すると、対話中にファシリテーターが介入したのは、開始5分くらいにAさんが「都会は自然と関わらない」という発言に対して、Aさんの発言をそのまま繰り返したことで、開始10分後くらいにCさんがテレビで「都会で働き盛りのサラリーマンがしんどくなったりして、田舎に家族、一家で総出で済み移るっていうのを見て〔……〕その人の決意とかは変わるのではないかなというふうに思いました」と述べた時に、「今のCさんの意見はいかがですか」と発言を促したこと、そして開始15分後くらいに、「人と会うということと近所付き合いでの触れ合いは違うのかな」と問いかけただけであった。

先行研究ではファシリテーターの介入に関して、例えば梶谷は次のように述べている。

哲学対話にとって、参加者の自発性、主体性は、何より重要である。対話の内容じたいは、進行役が上手に問いかけて導いていけば、哲学的になっていく。

だがその場合、下手をすると、参加者はだんだん受け身になって、進行役がうまく進めてくれることを期待するようになる。そうなると、進行役が有能でなければ回らなくなる。

しかも、有能であればあるほど、参加者はさらに受け身になる。それで参加者の満足度は上がるかもしれないが、消費者気分になっていく。そして対話がうまくいかなかったり、面白くなかったりすると、進行役のせいにする。それは悪循環で、双方にとって不幸なことである（梶谷真司『考えるとはどういうことか』幻冬舎、2018年、233頁）。

実際、筆者がファシリテーターを始めてすぐの時には、介入の機会も多かったが、近年では、初めて哲学対話を行う人たちの集まりであれば問いかけや発言をくり返す機会を増やすが、経験がある参加者が多い場合は、ほとんど介入することを控えている。ただし、介入しないからと言って、対話に参加していない訳ではない。

土屋は、哲学対話のファシリテーターの「コツらしきこと」として、「まず参加者の誰よりも進行役自身が問いの本当の答え（真理）を知りたいと思って一生懸命考えること」⁹。そして次に、ファシリテーター自

身も哲学対話のルールに従って、「安心して考えられる空間に身を置けるように努めること」¹⁰。このルールに従い、「とにかく進行役自身も考えることを楽しみ、対話しながら思考に集中する」¹¹ことだと述べている。

土屋と同じく梶谷もまたファシリテーターがルールを示し、ルールに則って対話をおこなうことは、哲学対話のいわば前提として述べている¹²。ルールに関しては、3.2.で確認したように、ふりかえりシートにおいても、「初めに、対話をする上で守るべきルールと、心配しなくて良い点を先生が示してください、参加者の全員がそれを守りながら対話を行うことが出来たから」安心安全な空間だったという回答が見られたように、ルールがあるからこそ他人の意見を聞くことができ、また自分の意見を安心して言うことができるのだろう。

5 結びに代えて

以上に見てきたように、対話の前提条件ともなる安心・安全な場の構築のためには、対話のルールが存在すること、そのルールを参加者全員が守ること、回数を重ねること、新しい人との出会いを楽しむ姿勢で望むこと、時間をかけて他者の意見を、自分への人格批判ではなく意見の批判だと捉えることなど、参加者側が意識しなければならないことや、対話の場に望む姿勢を形成する必要があることが明らかになった。

その上で、安心・安全な対話の場の構築の際に、どのような教師の姿勢が求められるのかと言えば、先の土屋や梶谷の先行研究のように、ルールが守られるようにすることであり、みずからもルールを守って対話に参加することであろう。特に「人の話をよく聞こう」といった傾聴の態度は、今回のふりかえりシートにもあったように、ファシリテーターが率先して実践していくべき態度であろう。

ただし、ファシリテーターは、ルールの中に、例えば「自分から発言しよう」というルールがあったとしても、どの程度なのかといったことは対話の内容にも左右されるであろうし、また特に学校教育や専門的な知識を教え共に探究する大学という機関において、ファシリテーターである教師が自分の意見を述べることは、参加者が「先生の言うことだから」とファシリテーターの発言を鵜呑みにする危険性も潜在的にはあ

るのではないだろうか。もし、今回のインタビューであつたように、「ファシリテーターの意見も聞きたい」場合は、参加者の学生がファシリテーターである教師に、「いや、それは違うと思います」と理由を添えて言えるような関係性が必要であるだろう。一教員が対話の参加者として対話に参加する場合でも、今回学部生が大学院生にたいして気を遣ったように、学年や立場の非対称的な関係性が生じてしまうため、対話においては同じ問いを探究する者という意味では立場が対等であることを確認することや、対話は回数を重ねる必要があると参加者に先に示すことも必要かもしれない。

【引用・参考文献】

- 梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎、2018年。
- 神戸和佳子・廣畑光希「哲学対話」下司昌編『道徳教育』学文社、2023年、217-225頁。
- 土屋陽介『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』青春出版社、2019年。
- 「哲学対話と徳」立花幸司編『徳の教育と哲学:理論から実践、そして応用まで』東洋館出版社、2023年。
- Lipman, Matthew. *Thinking in Education* (second ed.). Cambridge University Press, 2003. [邦訳: リップマン, マンシュウ『探求の共同体:考えるための教室』河野哲也, 土屋陽介, 村瀬智之監訳. 玉川大学出版部, 2014年]

【謝辞】

第1回「対話の時間」にご参加いただき、調査にご協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。

【付記】

本論文は、福山市立大学2022年度重点研究の助成を受けて執筆されている。

本研究は2022年9月に福山市立大学倫理審査委員会の審査を受け承認された。(承認番号2022014)

- 1 土屋陽介「哲学対話と徳」立花幸司編『徳の教育と哲学:理論から実践、そして応用まで』東洋館出版社、2023年、142頁。
- 2 同書、142頁。
- 3 同書、142頁。

- 4 小川泰浩、教育哲学会第66回大会ラウンドテーブル1「対話型政治教育の意義と課題～九州での実践を踏まえて」2023年10月8日発表資料「対話型政治教育としての高校生との哲学対話と「隠れたカリキュラム」」スライド4。ただし、「特に日本の学校においては複数のルーツから生まれた実践が混ざり合って発展しており、特定の提唱者や定まった手法があるわけではないため、全体像がとらえづらいという点がある」(神戸和佳子・廣畑光希「哲学対話」下司昌編『道徳教育』学文社、2023年、217頁) ことも付言しておかなければならない。
- 5 土屋、前掲書、143頁。
- 6 同書、143頁。
- 7 同書、143-144頁。
- 8 本節は、福山市立大学2022年度重点研究成果発表会資料(2023年6月5日)において示した研究の概要に大幅に加筆修正を加えたものである。
- 9 土屋陽介『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』青春出版社、2019年、209頁。
- 10 同書、209頁。
- 11 同書、209頁。
- 12 梶谷、前掲書、230-236頁。

(2023年10月17日受稿、2023年11月24日受理)

An Examination of Facilitators’ Attitudes in Philosophical Dialogue with University Students: The 1st “Time for Dialogue”

TANAKA Naomi ⁽¹⁾

The purpose of this paper is to report on the content of the first “Time for Dialogue”. This also aims to show some suggestions for the attitude of facilitators who practice philosophical dialogue with university students, to make a safer dialogue, through a review of the dialogue. Firstly, how the “Time for Dialogue” was conducted is reported. Secondly, the reflection sheets and interview surveys conducted after this practice are analyzed. Finally, other than the teacher’s attitude toward listening, additional factors are shown to have contributed to the creation of such a safe place.

Keywords : philosophical dialogue, facilitator, attitude of teacher, dialogic practice

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University